

救命救急センターにおいて死亡退院する患者の家族へのケアの現状と課題

Current status and challenges of care to the families of patients who die in an emergency and critical care center.

慶應義塾大学 大学院健康マネジメント研究科
看護学専修 精神看護分野 (CNS プログラム)
修士課程 2年 小山 良子

1. はじめに

救命救急センターには、突然死や、数時間から数日後に死が迫っている患者が搬送されることが多い。予期しない突然死は家族の強い悲嘆反応を引き起こし、悲嘆からの回復はより困難になるため、救命救急センターにおける家族ケアは重要であると考えられる。そこで、本研究では、救命救急センターにおいて死亡退院する患者の家族へのケアの現状と課題を明らかにすることを目的とした。

2. 方法

- 1) 研究デザイン：自己記述式質問紙を用いた記述的研究。
- 2) 研究対象：救命救急センター1施設に勤務する看護師。
- 3) 調査内容：「看護師の個人属性」「死亡退院する患者の家族へのケアの現状」「今後実施したい家族ケア」について、質問紙を作成した。(1) 看護師の個人属性 10項目、(2) 救命救急センターにおいて死亡退院する患者の家族へのケアの現状；家族ケアの中核的 5要素【家族の権利擁護】【家族の苦痛を緩和する】【家族との信頼関係を維持する】【家族に十分な情報を提供する】【家族にケア提供場面への参加を促す】についての 30項目を 5段階のリッカートスケールで評価し、具体的に実施しているケア内容および、家族ケアを実施する際に難しいと感じることの自由記述項目を設けた。(3) 今後実施したい家族ケアの自由記述項目を設けた。
- 4) 分析方法：統計学的分析には、SPSS Statics 23を用いた。記述統計量を算出し、家族ケア実施得点と看護師の個人属性の関係性について、相関分析および平均値の差の検定を行った。また、自由記述項目の内容は、意味のまとまりごとに分類し整理した。
- 5) 倫理的配慮：対象者および研究対象設には、研究への参加協力の自由意思を尊重すること、拒否しても不利益を受けない権利、研究への参加に伴うリスクと対応、プライバシー及び個人情報の取扱い、データの匿名性、研究結果の公表方法、資料の保管・廃棄方法について、研究協力依頼書にて説明し保証した。なお、本研究は、慶應義塾大学大学院健康マネジメント研究科研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

3. 結果・考察

51名より回答が得られ (回収率 67.1%)、全員を分析対象とした。

救命救急センターにおける家族ケアとして必要な要素には、【家族の権利擁護】【家族の苦痛を緩和する】【家族との信頼関係を維持する】【家族に十分な情報を提供する】【家族にケア提供場面への参加を促す】があり、いずれのケアもとときどき～かなり実施されており、全体的に家族ケアがよく実施されていることが分かった。中でも【家族との信頼関係を維持する】【家族の苦痛を緩和する】【家族にケア提供場面への参加を促す】ケアは、実施頻度が高く、項目別で見ると「患者の外見を整えることに注意を払う」「思いやりをもち、共感的に、誠実に対応する」「臨終の場面に家族が立ち会えるよう調整する」「遺品の確認や受け渡しの際、遺品をていねいに扱う」などの実施頻度が高かった。身体の損傷が激しい患者に面会する家族のショックを和らげるケアが心掛けられ、家族に寄り添い、看取りの場面の調整、患者の尊厳を守るケアが提供されていた。

全体的に実施頻度の低かったケア要素は【家族の権利擁護】【家族に十分な情報を提供する】であり、「必要に応じて家族も含めたカンファレンスを開催し、家族と情報を共有する」や「退院後に活用できる社会資源（相談窓口やピアサポートグループなど）の情報を伝える」は、あまり実施されていなかった。これらの要素については、家族ケア研修を受講している看護師は実施頻度が高かった。家族と共に情報を共有し、社会資源を紹介することができるのは、学習によって知識を深め専門性を高めたことが影響していると考えられる。または、積極的に家族に関わる姿勢のある看護師が研修に参加しているとも考えられる。「退院後に活用できる社会資源の情報を伝える」ケアの実施頻度が高いのは、看護師経験年数や救命救急センター経験年数が長い、専門認定を受けている、家族ケア研修を受講している看護師であり、この結果は臨床経験を積み、また研修を通して知識や技術を高めることの重要性を示すものである。

課題としては、「看護師のスキル不足」「時間や場所などの制約がある環境」「患者や家族の特性の違い」「他職種との連携不足」が挙げられ、経験や学習の積み重ね、チームの連携促進が必要であると考えられた。

救命や集中治療が優先される環境にあり、危機的状況におかれているからこそ、救命救急センターにおいて死亡退院する家族のケアとして、家族の全人的な苦痛を注意深く観察し、ありのまま受け止め、家族の特性に合わせたケアが必要となる。そして、危機的介入などのサポートを急性期に行うだけでなく、長い視点で包括的なサポート体制を整えていく必要がある。

4. 研究成果の活用

本研究により、救命救急センターにおいて死亡退院する患者の家族へのケアの現状と課題が明らかになった。今後、さらにグリーフケアも含めたよりよい家族ケアのありかたを検討していく基礎資料とする。研究成果は 2016 年 11 月に開催された慶應義塾大学 SFC Open Research Forum 2016 でポスター発表した。

5. 謝辞

本研究にご協力いただきました看護師の皆さま、ご指導いただきました教員の皆さま、ご支援いただきました湘南藤沢学会に、心より感謝申し上げます。